

家族だけがケアの担い手ではない③

「家族の中で起こったことは、家族の中で解決すべき」という価値観が根強い日本の社会において、近年は家族のありようが大きく変容しているにもかかわらず、依然としてこの価値観に支配されつづけているために、大きな苦悩を抱えている現役世代が急増しており、そんな事例を紹介しています。



都内の会社で営業チームのリーダーの職についている M 男さん（52）。これまで必死に仕事に没頭し、これといった趣味もなく結婚はしていません。栃木県の実家では、父親は 5 年前に他界し、母親（82）がひとりで暮らしています。一人っ子できょうだいのない M 男さんは、自分しか母親を守る人間はいない、育ててもらった恩返しをしなければという意識が強く、これまでもたびたび週末に栃木県の実家に帰って母親の様子を見ていました。

これまで介護保険も使わず元気に暮らしていた母親が転倒、大腿骨骨折により病院に緊急搬送されたとの連絡が入りました。M 男さんは、すぐに 3 日間の有給休暇を取得して、栃木県の病院に向かいました。しかし現在、新しいプロジェクトの立ち上げ時期にあり、リーダーである M 男さんは休暇を取りながらも、プロジェクトの進捗について何度も電話やオンライン打合せで報告を受けたり指示を出したりしなければならない状況でした。

一度、東京の仕事に戻りましたが、母親はすぐにその病院を退院しなければならず、次の療養先としてリハビリ病院か老健かを、M 男さんが見学をして選ばなければならず、そのために再度、栃木県に行くことになりました。

その後は、有料老人ホーム入居か在宅介護かという選択を迫られ、年金収入が少ない母親が施設入居するには金融資産が足りず、母親名義の自宅を売却して入居資金に充てようとしても入院中に認知症が進行してしまった母親が売却することは難しく、在宅介護を選ぶとヘルパーが来てくれない時間に母親を一人にしておくことが M 男さんには親不孝に感じてしまう。そんな難しい選択をしなければならない状況となった M 男さんは「母には自分しかいない」という気持ちで、有給休暇も介護休暇もすべて使って対応しました。

今、会社のプロジェクトチームでは、若い人たちが男性も女性も複数人育児休業をしている中で、リーダーの M 男さんが介護休業で長期に離脱することを、とても部下にも上司にも言い出せない状況です。

追い詰められた M 男さんは「親への恩返し、いっそのこと介護を理由に退職して、自分が母親の面倒を見た方がよいのではないかと、介護離職への道を考え始めました。

この後、もし M 男さんが介護離職を選んでしまっても、M 男さんは精神的にも経済的にも楽になることはないのではないのでしょうか。超高齢社会をむかえ、現役世代の負担が増大する今、「家族だけがケアの担い手ではない」という新しい価値観を推進していかなければなりません。

つづく